

研究所だより

第470号
2024年 4月10日
発行：土佐清水市教育研究所
TEL 82-3015

“春のうららの 隅田川 のぼりくだりの 船人が
権(かい)のしづくも 花と散る ながめを何に たとふべき”
『花』 唱歌 作曲：瀧 廉太郎 1900(明治33)年



～春爛漫 2024(令和6)年度スタート～

風雨に舞う桜の花びらが、空を、地面を、水面を桜色に染めるなか、各校では2024(令和6)年度の始業式、入学式が執り行われたことと思います。久しぶりに子どもたちが登校してきた学校には、元気で、明るい声が響き渡っていることでしょう。

学校(学級)は、子どもたちにとって集団生活の基盤です。自分と心の通い合う仲間がいる。その事が学校生活を充実したものにします。一人ひとりがかけがえのない存在として尊重され、安心して生活する権利を持っていることに気づかせ、心の通い合う温かい人間関係を育てていくことが大切です。

学校生活で、子どもたちが一番長く過ごすのが授業の時間です。この時間が満たされていること(わかり、できて、使えて、学び合える)が子どもたちの喜びとなります。教師の授業力向上とより良い集団づくりは車の両輪です。両輪がうまくかみ合えば互いに相乗効果を発揮していきます。子どもと共により良い集団づくり、授業づくりに取り組んでいきましょう。



『喜んで登校 満足して下校』



《着任・離任の挨拶》

＝着任挨拶＝

○岡野 孝弘(教育センター所長)

令和6年4月1日付で教育センター所長に着任いたしました岡野孝弘と申します。教育行政部門は実務経験がありませんが、心機一転全力を尽くして教育センターの運営に精進いたす所存でございます。みなさまからのご指導・ご鞭撻を賜ります様よろしくお願ひいたします。

○渡会 紀和(教育研究所研究員)

今年度より教育研究所研究員としてお世話になる渡会紀和です。主にジョン万次郎を軸としたふるさと教育、不登校及び発達障害傾向の児童生徒への支援方法について研究を進めます。清水の魅力ある教育づくりに少しでも役立てるよう、微力ながら精一杯尽力いたします。学校にお邪魔することもあろうかと思いますが、よろしくお願ひいたします。

○沖 比呂志(少年補導センター補導専門職員)

この度、少年補導センターの補導専門職員として、前任の奥谷補導教員の業務を引き継ぐこととなりました沖比呂志と申します。

よく人生には3つのさかがあるとされます。上り坂、下り坂、そして、まさか。40年間の市役所勤務も含め公私ともに色々なまさかを経験してきましたが、今回もその一つかもしれません。現役引退してもいいかなと思っていた心にまさかの火がともった感じがしています。

青少年の非行を防止し、安全を確保、そして健全な育成を図ること。この補導センターの業務理念、目的が果たせるよう、力を尽くさせて頂きたいと思ひます。

＝離任挨拶＝

○田村 五鈴(こども未来課課長)

この度の人事異動で、こども未来課へ異動となりました。短い間でしたが、2年間大変お世話になりました。在籍中は、皆様からご指導、ご協力をいただき心から感謝しております。異動先も同じ教育委員会なので、これからもお世話になることが多々あると思ひますが、どうぞよろしくお願ひ致します。

《教育センターの紹介》

教育センターでは、少年補導センター、教育研究所、適応指導教室、家庭児童相談室の4部署とスクールソーシャルワーカー、ヤングケアラーコーディネーター、アウトリーチ型カウンセラーが連携しながら、児童・生徒を取り巻く教育環境の整備、教職員・保護者等の教育相談体制を確立し、様々な教育分野に対応し、可能な協力と支援をさせていただきます。

(教育センター組織図)

*センター：82-3015

所長：岡野 孝弘
主管全般
所長補佐：永野 博文
主管全般補佐、庶務、予算等

少年補導センター 82-3501	教育研究所 82-3015	適応指導教室 82-3016	家庭児童相談室 82-0355	YCC 注1 82-0355	SSW 注2 82-3016
沖 比呂志 (補導専門職員)	勝間 康人 (主任研究員) 渡会 紀和 (研究員)	泥谷 人美 (児童生徒相談員)	岡部 千代 (児童家庭相談員) 田村 雅宏 (児童虐待防止対策 コーディネーター)	中野 史也	浜岡 篤 文野 貴之
補導活動 相談活動 環境浄化活動 広報活動 研修活動	教育内容・方法の 調査研究 教職員研修の支援 教育研究会運営 教育活動の支援 あすなろネットワークの 運営	不登校児童生徒 支援 教育相談 適応指導教室 (あすなろ教室) の運営	児童家庭相談全般 (要保護児童対策地域 協議会調整機関) 児童虐待防止対策	ヤングケアラー への相談支援等 教育相談全般	教育相談全般

○アウトリーチ型スクールカウンセラー(ORSC)：小松 宏暢さん

*週2回(火曜日：足摺岬・三崎・下川口小学校・水曜日：教育センター)訪問相談・支援等を行います。

*注1：YCC(ヤングケアラーコーディネーター)

ヤングケアラーへの相談支援に関する業務を行います。

*注2：SSW(スクールソーシャルワーカー)

いじめ、不登校、暴力行為、児童虐待など児童生徒の置かれているさまざまな環境に働きかけて子どもの状態を改善するため、学校と関係機関を繋げていきます。



～学級開きに向けて～

クラスの子も不登校の子も孤立させない学級経営 一人と人のつながりを意識して～

千葉県公立中学校 鈴木 博喜 教頭

1 不登校児童生徒のためにすべきこと

(1) 個別の支援計画などによる引き継ぎ資料の作成

私の所属する市では、不登校児童生徒について個別の支援ファイルを作成し、前年度にあったことを必ず次年度に引き継いでいます。本人自身のこと、友人関係、学校生活の様子、家庭状況、通院歴、放課後デイサービスなどの利用の有無など、大切だと思われる情報はなるべく多くファイリングしてあります。教育相談担当教員や生徒指導主事などに尋ねるとわかるはずです。

(2) 生徒指導部会や教育相談部会、個別の校内支援会議による組織体制の確保

学校おける諸問題には組織で対応するというのも常識です。不登校児童生徒に対しても主に抱えている問題が「教育」なのか「医療」なのか「福祉」なのかという見立ては大変重要です。管理職や生徒指導主事、SCや学年職員を交えた会議を開き、組織として総合的に判断します。そのうえで、管理職が教育委員会や児童相談所などに状況を報告・相談しながら、ていねいに事案を扱っていくことになるでしょう。いずれにしても、不登校児童生徒を孤立させず、つながり続けることが大切です。

(3) 4月当初の保護者と児童生徒本人との顔合わせ

これも皆さんが取り組んでいることとは思いますが、家庭訪問や面談を年度当初に行い、お互いを知り合うことが大切です(家庭訪問はトラブル未然防止のため、一人ではなく二人で行うことをお勧めします)。

その後の定期連絡の方法や、保護者や児童生徒が困っていること、配慮してほしいことなどを直接聞きながら、柔軟に対応していくことが重要です。不登校児童生徒の思いを第一にし、学校に無理に來させることを目標にしていないことを態度で示すことです。

不登校と言っても、理由は様々です。直近の友達とのトラブルが原因等、学校内で解決をめざせることもあれば、発達障害等の特性が影響している場合や成育歴が要因にある場合等、早期の解決をめざすことが難しいケースもあります。また学校に行くことに価値を見出さず、積極的に不登校を選んでいる家庭もあります。ですから、それぞれの状況を見極めながら、本人や家庭の意向に寄り添う姿勢が大切だと思います。

次に、「なぜ」と聞かないことも大切だと思います。「なぜ」は過去を責める質問です。不登校の原因を見立てることは大切ですが、「なぜ」は使わずに「どう」を使うとよいと思います。「どう」はこれからの未来を建設的に考えられる質問です。本人と家庭と学校で、これから「どう」していきましょうかという話し方のほうが前向きですし、「どう」を使うと定期的に家庭と連絡を取らざるをえなくなると思います。

この、家庭とつながっている状態の維持がとても大事です。なぜなら、本人や家庭の「どう」したいは、時間の経過とともに変わっているからです。学校にまったく行く気がなかった児童生徒が、学校に行ってみようかと思うときがあります。こちらが促したのではなく、本人が自分の意志でそう思ったときは、とても大切なタイミングです。つながりを保っていれば、このタイミングをつかまえることができます。

一方、本人が学校に來たいと言ったときに、受け入れるクラスが思いやりに欠けるクラスだったり落ち着きのないクラスだったらどうでしょう。どんな学級が不登校児童生徒の戻りやすい学級なのでしょう。



2 学級経営ですべきこと

(1) どのような学級をつくるか

不登校児童生徒がいるか否かにかかわらず、**あたたかく、安心・安全で親和性のある学級**。これが理想の学級ではないでしょうか。そんな学級づくりの一つの方法が、構成的グループエンカウンター(以下SGE)を活用した、**生徒どうしのつながりづくり**だと思います。以下にSGEを使った学級経営の仕方を簡単に述べます。もっと学びたい方のために、お勧めの書籍を3冊最後に載せておきます。

(2) SGEの真髄

SGEはレクではなく、楽しいだけの体験でもありません。國分(2018)は次のように語っています。
あるがままの自分に気づき、それを他者にオープンにする。それを受けて他者も自分の内界をオープンにする。そしてお互いの世界を共有する。この心的状況を「ふれあい」または「エンカウンター」という。

自分を表現できて他者がそれを受け止めてくれる(自己開示と他者理解)学級。自分と他者が心的につながっている学級。それはどのようにして可能でしょうか。

(3) つながり「↔」のある学級

私は若い頃、自分と生徒がうまくつながっているかどうかという視点しかもっていませんでした。教師↔生徒という関係性です。もちろんそれも大切ですが、SGEを学んでから、学級経営で大切な**つながり**の方向性は、**生徒↔生徒**もあることがわかってきました。しかも、ある特定の生徒の間だけにこの「↔」があるのではなく、クラス中の生徒どうし間で「↔」は行き交うようなクラスです『アドラー心理学を活かした学級づくり』(102頁)には、左右のペアを「Aペア」、前後のペアを「Bペア」斜めのペアを「Cペア」とすると、三通りのペアができるというペアづくりの工夫も載っています。ペアワークのとき、「ペアを作りましょう」だけだと、孤立してしまう生徒がでたりします。そうした生徒が出ないよう“構成的”につながりづくりを考えることで、不登校を予防し、誰もが安心して過ごせる学級になっていくと思います。固着したペアや小グループを作らないようにするための“構成的”な仕掛けは『どんな学級にも使えるエンカウンター20選』に多く載っています。



(4) 規律の大切さ(私の失敗を通して)

ここで、私の失敗を一つ紹介します。そこから、学級経営に大切なもう一つの要素、規律について、私なりに示してみたいと思います。

教務主任として学級担任を持たなくなり、教科担任として中学校1年生のA組とB組を持ちました。どんな意見も言える親和的な雰囲気をめざして授業を行っていましたが、夏休み前から、A組の生徒たちとうまくいっているのに、B組の生徒たちとは人間関係がうまくいけなくなりました。私の指示に文句を言う生徒、私語を注意しても居直る生徒が出てきました。同じように授業をしていてどうしてこんなに違いがあるのかと疑問に思っているとき、國分(2018)のこんな言葉を思い出しました。

カウンセラーは、一時的にエゴ機能(トランス、柔軟性、現実感覚)が弱くなっている人の「**補助自我を務めるための技法**」を必要とする。

一方、SGEリーダーは、エゴ機能は健常に機能しているが「**生き方・あり方を検索している人**」の**超自我機能**(右往左往しない**一貫性・安定性**)を果たすメンター(師匠)である。そのために工夫した結果の技法である。

授業の中で、生徒の質問から雑談をしたり、騒がしくなったりすることはあるものです。そんなときA組には、「静かにしようぜ」「もう授業に戻りましょう」という声かけができる生徒がいました。学級の超自我機能(國分の定義とは少しずれますが、フロイトが説いたのは、道徳的な命令や裁きなどを行う良心のこと)の役割を果たしています。それに対してB組には、学級自体にそうした超自我機能がなく、話を脱線させようとする生徒やネガティブな発言をする生徒がクラスの雰囲気を決定していました。そうした生徒たちの意見にも寄り添おうとしすぎた私は、結果として**一貫性も安定性も失っていた**のです。



それに気づいていてから、私はB組での態度を変えました。話を脱線させようとする生徒に「後で話しましょう」と言い、明るい雰囲気も抑えました。明るく親和性のあるクラスづくりに反するのではないかと心配しましたが、私が態度を変えたことで、クラスにも変化が生じはじめました。今まで真面目に静かに授業を受けていた女子生徒が発言するようになったり、クラスの雰囲気を悪くする生徒に睨みをきかせたりするようになったことで、秩序が戻ってきたのです。すると、ネガティブな発言も減り、結果的に明るさと親和性も感じられるようになったのです。真面目に授業を受けたかった生徒たちの気持ちを、私は無視し続けてしまっていたことに気づきました。

担任をしていたときを思い返してみますと、最初は厳しく接するほうが学級経営がうまくいってました。私は、それを威圧的な学級経営ではないかと思ったりもしましたが、そうではなく、超自我機能を担任が担うことで、クラスの安心・安全を保障していたのかもしれないと、このような経験から思い直すようになりました。



3 一人二役で様々なつながりをつくる教師

まずは1の(3)のように、不登校児童生徒の親子との**つながり**をつくること。それには國分の言葉にある**補助自我機能**の役割を果たす教師になることが、大切だと思います。

次に、学級経営上、児童生徒の模範となるような毅然とした**超自我機能**をもったリーダーをめざすこと。四月当初は、**教師⇔生徒の「↔」**を安心・安定させつつ、**生徒⇔生徒の「↔」**が、あたたかく親和的な学級経営をめざせば、不登校児童生徒が学級に戻る意思を示したときに、結果として一番戻りやすい学級になっていることと思います。

不登校児童生徒に寄り添うことができる補助自我機能と、学級の児童生徒のための超自我機能という一人二役ができる教師になり、様々な**つながり**をつくることを意識し、誰も孤立させないような準備をすることが最も大切だと思います。

*「令和4年度 児童生徒の問題行動・不登校当生徒指導上の諸問題に関する調査」

引用文献

- ・明里康弘『どんな学級にも使えるエンカウンター20選』図書文化、2007年
- ・國分康孝『構成的グループエンカウンターの実践と方法』図書文化、2018年
- ・会沢信彦「アドラー心理学を活かした学級づくり」学事出版、2017年

家庭訪問で子どもの姿をつかむ ～最初の出会いを大切に～

家庭訪問は、「家庭での子どもの様子や保護者の教育要求を聞いて今後の教育に役立てるために行う」という点をしっかりおさえておく必要があります。

最初の出会いですから、まずは保護者の話を聞く（傾聴）ことです。話を受け止めることから良好な関係（パートナー）ができてきます。話の中で「それは…」 「けれど…」と疑問を呈したり、否定的な言葉が出ると話は進みません。保護者の悩みに耳を傾け、共感的理解者になることから、共同の歩みが始まります。

その点を配慮しながら家庭訪問に臨んではいかがでしょうか。



具体的におさえるポイントとして

○子どもの育っている教育環境から子どもの姿をつかむ

- ・災害、防災等の緊急時に対応するために、子どもの家の所在地を確認する。
- ・子どもの生活環境を知る。（地域の特性、通学路や危険箇所、家庭学習、遊び場、家事分担など）
- ・保護者の子どもについての考えなどを率直に聞く。（育児観、教育観）
- ・家庭における子どもの長所、短所を知る。（親の子ども観など）
- ・保護者と教師の情報交換、相互理解を図る。（子どもの病気、怪我、進路、友だち関係など、学校では話せないことなども話し合う場になる。）
- ・保護者と子、教師の信頼関係を築く。

◇書籍の紹介◇

- ① 「中学校 学級経営ハンドブック」 編著：鹿嶋 真弓 吉本 恭子
〈学級環境づくり・仲間づくり・キャリアづくり〉 (図書文化)

本書には、学級担任を対象に、集団のルールや規律が守られ、協力し合える人間関係があり、お互いが成長し合うことのできる学級を育てるためには、どのように集団を形成していけばいいのかという道筋を、「環境・約束」「信頼・仲間」「キャリア」の3つの柱に沿って示しています。「何をするか」だけでなく、「キーワード」や「押さえておきたいポイント」を具体的に示し、すぐに実践できる内容となっています。

- ② 「通常の学級担任がつくる個別の指導計画」 編著：廣瀬 由美子 佐藤 克敏
(東洋館出版社)

学校には従来から培われてきた多くの教育的財産があります。その財産は、特別支援教育になっても、いいえ特別支援教育だからこそ活かせることが沢山あります。特別支援教育を進めていく上で重要な課題は、通常の学級の先生方にも、集団から個をみる視点ばかりでなく、子ども一人を丸ごとみて理解し、個に焦点を当てた指導や視点、配慮ができるようになることだと思います。

- ③ 「自閉症スペクトラムの子どもたちをサポートする本」 著者：榊原 洋一
(ナツメ社)

特徴と原因・診断の流れ・支援のしかたなど自閉症スペクトラムの基礎知識がわかる行動療法、ABA、TEACCHによる構造化などさまざまな療育プログラムを紹介。家庭・園・学校での効果的なサポート例が満載の一冊。

- ④ 「発達障害のある子どもと話す27のポイント」 編著者：湯汲 英史
〈わかりたい気持ちを高めるため〉 (かもがわ出版)

本書は、子どもや青年たちとコミュニケーションをとる際に、配慮すべきポイントなどを紹介するためにつくられました。さらには、コミュニケーションを充実させることを通して、本人の「わかりたい」という意欲を育みたいとも考えました。

①



②



③



④



上記以外にも様々な書籍を所蔵しておりますのでご活用ください。

